# ロマン派の文芸雑誌、あるいは近代の批評空間
## ―フリードリヒ・シュレーゲル『アテネーウム』における「断片」「散文」「批評」概念―

堺　　雅 志

# Die Literaturzeitschrift der Romantik oder der Freiraum der 'Rezension'
## －Die Sprach- und Begriffswahl in Friedrich Schlegels *Das Athenäum*－

SAKAI Masashi

**Abstract**

Im folgenden Beitrag soll Friedrich Schlegels Zeitschrift *Das Athenäum* im Kontext des Lesens jener Epoche aufs neue gelesen werden. Die Lesewut bzw. Schreibwut in der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts formte den Akt des Schreibens und Lesens gründlich um. Einerseits wurde das Lesen als Vergnügung durch die Bedürfnisse und Ansprüche des breiten Publikums angespornt, anderseits musste demgegenüber von ernsthaft Literaturschaffenden die Habilitation der Literatur zur Kunstform behauptet werden. Fr. Schlegel leistete einen großen Beitrag zur Erhöhung der Literatur, indem er die "progressive Universalpoesie" also die romantische Poesie proklamierte. In ihr verschmolzen in den verschiedenen literarischen Gattungen Poesie, Philosophie und Kritik organisch und harmonisch miteinander, und sollten so das Leben und die Gesellschaft des Publikums insgesamt poetisch machen.
Bei seinen Ausführungen zur romantischen Poesie benutzt Schlegel häufig den Konjunktiv II (besonders *sollte*). Mit dieser Wahl betont er, dass die romantische Poesie sich noch im Prozess ihrer Verwirklichung befindet und somit noch im "Werden" ist. Durch seine Befürwortung einer romantischen literarischen Form, die noch nicht ist, aber einst sein soll, bereitete er der Rezension Freiräume, die sich ihr nicht nur im gleichen Zeitalter sondern auch in der Zukunft eröffnen. Schlegel arbeitet hier mit den Begriffen 'Fragment', 'Prosa', und 'Kritik', die ihm besonders geeignet erscheinen, neue Wege zu einer modernen Rezension zu ermöglichen.

### はじめに

ある統計に拠れば、1800年のドイツにおけるラテン語の出版物はわずかに4パーセントとなり、ドイツ語の出版物がその大半を占めることとなったという。[1] これは、出版という営為が対象とする読者層が、ある一部の教養階級から、大衆へと移行した事実を物語っている。そしてこれは同時に、古来学問上の共通語であったラテン語ではなく、母語であるドイツ語で、さまざまな「教養」を享受で

＊本論は、長崎外国語大学学内研究奨励費(2006-08)による研究成果の一部である。

[1] Reinhard Wittmann: *Der deutsche Buchmarkt in Osteuropa im 18. Jahrhundert － Voraussetzungen und Probleme.* In: *Buchmarkt und Lektüre im 18. und 19. Jahrhundert.* Tübingen 1982, S.93-110. 同書に基づく戸叶勝也の統計に拠る。戸叶勝也『ドイツ出版の社会史』、三修社、1992年、134頁。

きる仕組みがこの時代に整いつつあったことを示唆するものである。すなわち18世紀啓蒙期の為政者や思想家たちが目指した「民衆の教化」は、「教養」を求め享受できる「大衆」をつくり上げ、また大衆の教養への渇望を「読書」というかたちで支援できる機会を提供することによって、その目的の一部を達したかに思われる。

同時に、この時代の人びとが浮かされた「読書熱」Lesewutは、この時代に出来した「病」であり、「読書」に関しては、啓蒙家たちのあいだではさまざまに議論が繰り広げられている。[2] 蓋し文学は、ことに小説を読むことは、娯楽であった。フリードリヒ・ニコライ（1733-1811）は、同時代の文壇に極めて大きな影響力を持つ出版者であり、批評家であって、ゴットホルト・エフライム・レッシング（1729-81）やモーゼス・メンデルスゾーン（1729-86）といった同時代の文壇の大御所を束ねつつ文芸雑誌を出版し、この時流を利用し、かつはまたさらに推し進めた人物である。いわば文学の娯楽としての側面を利用し尽くした憾みのある人物である。のちにロマン派の旗手となるフリードリヒ・シュレーゲル（1772-1829）は、ニコライの不興を買った文士のひとりであった。彼は兄アウグスト・ヴィルヘルム（1767-1845）とともに、文芸雑誌の自主出版をはじめる。この時代の「読書熱」は、あるいはその相補作用によって生じた「執筆熱」Schreibwutは、同時代の著述家たちを、自主出版に駆り立てる原動力ともなった。シュレーゲル兄弟もその時流に乗って、雑誌「アテネーウム」*Das Athenäum*（1798-1800）を出版する。けれどもここには、「娯楽」としての文学ではなく、「芸術」としての文学の側面を執拗に強調する彼らのあからさまな意図が見受けられる。執筆にあたったフリードリヒ・シュレーゲルの主張は、その理念および、形式ともに近代の文芸批評の礎を築いたことは、今でこそ異論のないところである[3]。けれども、文芸誌を通じてのこのような訴えは、当時の読者の理解を拒む結果となる。彼は当時の非難に応えるかたちで、『アテネーウム』を閉じるにあたって、その最終巻の巻末に「難解について」*Über die Unverständlichkeit*という弁明の論説を据えざるをえなかった。これは、文学の娯楽化、または商業化の一方で、文学を芸術として擁護したあり様にほかならない。本稿はフリードリヒ・シュレーゲルの『アテネーウム断片』における批評精神を、当時の文学を取り巻く文脈から再読する試みである。

---

[2] R. ヴィットマンは、18世紀の啓蒙家ベルクやカントのことばを引用しつつ、当時の読書を取り巻く状況の一面をつぎのようにまとめている。

> 読書は、カントによる有名な定義のように「自立することの訓練手段」とはならず、あまりに多くの人びとにとっては、「ただ時間を過ごし、永遠の依存状態にとどまることにしか」役立たないのであった。〔……〕「小説を読むことの結果は、さまざまな精神の変調の他に、娯楽を常態にしてしまうことである。」（R. ヴィットマン「十八世紀末に読書革命は起こったか」、ロジェ・シャルティエ、グリエルモ・カヴァッロ編『ヨーロッパ読書史 - 読むことの歴史』所収、407-444頁、引用は431、436頁。）

[3] しかしシュレーゲルが今日的評価をうるに至ったのは、20世紀初頭である。譬えばカール・クラウスは、シュレーゲルの韜晦をヘルマン・バール、フランツ・ブライらにみてとっている。彼らを批判する文脈で、シュレーゲル兄弟を踏まえての形容詞を多様し、「哲学しつつ片手持ち眼鏡をかけ、髪粉をかけ撒水し、敬虔で啓蒙的で、懐疑家であり熱狂家で、感傷的で破廉恥で、ゴッツィのように茶番じみつつレンツのように激動的で」と揶揄している。（Karl Kraus: *Die Fackel*. München 1968-76, Nr.514, S.18）また別の箇所では、「シュレーゲル兄弟に対する低俗で不毛な小市民的諷刺であり、読むに値するのは、『断片』と『ルツィンデ』からの引用くらいである。」（Nr.336, S.23）とし、シュレーゲルがにわかに批評家として模範の対象とされるようになったことが窺える。E. R. Curtiusは1932年に、当時のアカデミーにおける偏見と誤った評価を見直し、シュレーゲルの復権を図っている。E. R. Curtius: *Friedrich Schlegel und Frankreich. In: Kritische Essays zur europäischen Literatur*. 2. erweiterte Aufl. Bern 1954.

## 1　断　　片

Viele Werke der Alten sind Fragmente geworden. Viele Werke der Neuern sind es gleich bei der Entstehung. (AF 24)[4]
古代人の多くの作品は、今や断片になってしまった。近代人の多くの作品は、成立と同時に断片である。

シュレーゲルが好んで用いた文学形式である「断片」は、近代の精神のありようを先取りした形式であるといわれる。完結性が神話のように前提とされていた古典の作品に比べ、近代の文学は、ことにシュレーゲルが高らかに宣言したロマン派の文学は、「発展的綜合文学」progressive Universalpoesie（AF 116）と名付けられる。それはさまざまな文芸ジャンルの混交、学問分野の結合を目指すもので、伝統的形式を一旦揚棄し、新たなる形式を模索することであったから、始まりと同時に、終わりなき完成形が意図された体系の一部分であることが常に意識されていた。ゴットシェートによるフランス的古典主義のドイツへの導入が失敗に終わり、ゲーテやシラーという自由な才能が、汎ヨーロッパ的な意味でのロマン主義をドイツにもたらしたことによって、後に続くドイツロマン派は、古典的、機械的形式から免れ、有機的全体を目指すことが可能になった。「箴言」Aphorismen, Maximeといった同様のジャンルを指す従来の名称を避け、シュレーゲルが「断片」Fragmenteということばを敢えて使用したのは、すでに「砕かれたもの」として、かつてあった、そしていつかありうべき全体を予見させることばであったからに他ならない。

ところで、この時代に雑誌を表すことばになるOrganも、組織を構成する「機関」であり、肉体を構成する「器官」であったのであるから、そもそもが「部分」を表していた。批評という行為も、対象との依存関係にあり、かつはまた受容者を前提とするのであるから、これもまた部分である。雑誌は、この時代に遍く波及してゆく読書というシステムを構成するいわば「器官」だった。「書簡、対話のかたちで」とイメージされていた『アテネーウム』は、その成立当初から、批評の形式自体が部分であることを意識していた。

Ein Dialog ist eine Kette oder ein Kranz von Fragmenten. Ein Briefwechsel ist ein Dialog in vergrößtem Maßstabe, und Memorabilien sind ein System von Fragmenten. Es gibt noch keins, was in Stoff und Form fragmentalisch, zugleich ganz subjektiv und individuell, und ganz objektiv und wie ein notwendiger Teil im System aller Wissenschaften wäre. (AF 77)
対話とは断片の連鎖、あるいは花環である。往復書簡は規模の拡大した対話である。そして回想録は、断片の体系である。素材と形式において断片的であり、まったく主観的で個性的であると同時に、まったく客観的ですべての学問の体系のなかの必然的な一部分であるがごときも

[4] Friedrich Schlegel:. *Friedridh Schlegel 1794-1802: seine prosaischen Jugendschriften.* (Hg. v. J. Minor). Wien 1882. 引用に際しては、*Athenäums-Fragmente*は、AF、*Lyceums-Fragmente*は、LFと略記し、断片番号のみ示す。翻訳は、フリードリヒ・シュレーゲル『ロマン派文学論』山本定祐訳（冨山房、1978年）に拠ったが、論述の都合上、改訳した箇所もある。

のは、まだ存在していない。

『アテネーウム』は、シュレーゲル兄弟、ノヴァーリス、シュライアーマッハーによる断片の対話、あるいは断片の往復書簡が、あるひとつの「交響曲」を織りなすよう意図されていた。まだ存在したことのないかたちの文学を目指して、『アテネーウム』自体は有機的に生成していた。従って断片の集積に見える『アテネーウム』という文学的試みは、かつて存在していた体系を捨て去りつつも、体系を志向する精神のはたらきそのものを映し出すものであったようである。

> Es ist gleich tödlich für den Geist, ein System zu haben, und keins zu haben. Er wird sich also wohl entschließen müssen, beides zu verbinden. (AF 53)
> 一つの体系を持つことも、いかなる体系も持たないことも精神にとっては等しく致命的である。したがっておそらく精神は、両者を結びつける決心をしなければならなくなるであろう。

一つの体系にとどまらぬ精神のはたらきは、体系と非-体系のあいだを行き来する永遠の運動である。その動的なはたらきを瞬間という時間のなかに密封することが断片の役割である。従って、静的な状態に陥るドグマは避けられねばならない。そして作家と批評家（あるいは読者）とのあいだに介在する作品もまた、批評空間という運動の場を常に切り開くものでなければならない。

> Wenn der Autor dem Kritiker gar nichts mehr zu antworten weiß, so sagt er ihm gern: Du kannst es doch nicht besser machen. Das ist eben, als wenn ein dogmatischer Philosoph dem Skeptiker vorwerfen wollte, daß er kein System erfinden könne.(AF 66)
> 作家は、批評家にたいしてもはや答えるすべをもたなくなると、このように言いたがる。「けれども君はそれをもっとよくすることはできない」と。これはまさに、ドグマにとらわれた哲学者が懐疑家を、体系を見いだせぬ輩と非難したがることに等しい。

断片は従って、そこに体系全体の永遠の運動をそれぞれに胚胎する器官として、全体を予感しながら運動し続ける部分である。そして断片は、断片であると同時に一箇の全体である。断片が体系の一部であるとすれば、断片は同時に、部分として完成していることが求められていた。断片と体系とは決して矛盾した概念ではない。

> Ein Fragment muß gleich einem kleinen Kunstwerke von der umgeben Welt ganz abgesondert und in sich selbst vollendet sein ein Igel. (AF 206)
> 断片は、一箇の小さな芸術作品のように、周囲の世界から完全に切り離され、はりねずみのように、それ自身において完成されていなければならない。

[5] E. Behlerは、シュレーゲルの「断片」概念を定義づける前提としてのドイツ特有の「断片的思考」を簡潔に素描している。それによるとルターによる『コリント書』(13,19) の翻訳「私たちの知識は一部分（Stückwerk）である」をふまえてゲーテが「文学は断片のなかの断片である」と言った使用例を紹介し、遡ってレッシングやラーヴァターによる作品の題名による使用例をあげ、さらに人間の思考形式としてヘルダーやハーマンが用いた「断片」の概念をまずは踏まえておかなければならないことを指摘している。Ernst Behler: *Die Zeitschriften der Brüder Schlegel.* Darmstadt 1983, S.37f.

シュレーゲルが「断片」をめぐって繰り広げた断片的思想は、むろんドイツ特有の断片的思考の伝統の上になされたものである。[5] けれどもシュレーゲルの内省的「断片」をもって、「断片」は文学形式として「完成」し、後の批評空間の可能性を拡げることとなる。

## 2　散　　文

> Eine Definition der Poesie kann nur bestimmen, was sie sein soll, nicht was sie in der Wirklichkeit war und ist; sonst würde sie am kürzesten so lauten: Poesie ist, was man zu irgendeiner Zeit, an irgendeinem Orte so genannt hat. (AF 114)
> 文学の定義は、文学の過去および現在の実際の姿ではなくて、文学のあるべき姿を規定しうるに過ぎない。もしそうでないとすれば、きわめてそっけなく、文学とはある時代にある場所でそう名付けられていたところのものである、と定義されることになるであろう。

「発展的綜合文学」を目指していたシュレーゲルは、文学の定義の限界を「あるべきもの（当為）」sollenとして、いまだかつてあった試しがなく、また今も存在せぬものとしての「普遍」に結びつける。従ってシュレーゲルの文学の定義は、生成しつつある文学の可能性の描写といえる。当時は娯楽として蔑まれていた小説を、彼ほど散文の芸術として意識し、かつ定義付けしようとした理論家は前例を見ない。彼は、小説を言語のさまざまな可能性の芸術ジャンルとして位置づける。小説は、今日もなお定義付けされぬままその命脈を保ち続け、それどころか言語芸術の代表的なジャンルのような確固たる地位をえているように思われる。けれども小説が芸術であると主張した作家たちのなかで、とくに目を引くのはトーマス・マンであるが、これは反語的に、20世紀においてもなお小説は芸術ではないという根強い主張が一方にあることを示す例である。シュレーゲルがのちの世に送った残響は、総合芸術としての小説に、議論の余地を準備したかに思われる。ロマン主義（Romantik）と同語源の小説（Roman）は、シュレーゲルにとって、ジャンルを超え有機的に生成する発展的綜合文学の可能性にほかならなかった。[6]

> Die Lehren, welche ein Roman geben will, müssen solche sein, die sich nur im ganzen mitteilen, nicht einzeln beweisen und durch Zergliederung erschöpfen lassen. Sonst wäre die rhetorische Form ungleich vorzüglicher. (AF 111)
> 小説が提供しようとする教義は、小説全体のなかからのみ伝わってくるものでなくてはならない。個別的に証明されたり、分析によって引き出せるものであってはならない。さもなくば修辞的形式のほうが、比較にならぬほど優れているといえよう。

---

[6] 古典主義（Klassik）との対立概念であるロマン主義（Romantik）は、それぞれ汎ヨーロッパ主義と国家主義との対立と連動させられ、しばしばイデオロギーと結びつけられて、シュレーゲルを始めとするロマン主義者に政治的レッテルとして張られている。これがCurtiusの言う「偏見や誤った評価」（脚注３参照）であって、シュレーゲル研究を遅らせた要因である。

ここでは小説のあるべき姿が提示されているのであるが、それと同時に批評の態度をも網羅している。すなわち作品を全体として論じることであって、『アテネーウム』に掲載された『ゲーテのマイスターについて』*Über Goethes Meister*は、その批評精神の白眉となる。『ゲーテのマイスターについて』をはじめとして、『アテネーウム』全体に通奏底音のように鳴り響く「生成」Werdenということばの多用は、文学を有機体と考える思想の根幹から発せられている。

> Sinn für Poesie oder Philosophie hat der, für den sie ein Individuum ist. (AF 415)
> 文学や哲学に対する感覚を有している者にとっては、それらは一つの個体である。（文学や哲学が個体であると感じられる者こそ、それらに対する感覚を有している。）

敢えて「個体」Individuumという人間存在を表すことばを用いることによって、「有機的」という形容は文芸に冠される必然的なことばとなる。R. ウェレックが言うように、「有機的なもの」という隠喩を展開し尽くし、それを自らの批評において一貫して用いたのが、シュレーゲルである。[7]　シュレーゲルは、ことばが連鎖し、全体を志向するような「有機的な」語用の仕組みをも展開していた。

ところで、シュレーゲルほど、哲学と文学の一致を強調した者は彼の前には少ない。従ってこの思索の過程は文学が娯楽であるという軛から逃れられずにいる状態を突破するためには須く必要な作業であった。

> Auch die Philosophie ist das Resultat zwei streitender Kräfte, der Poesie und Praxis. Wo diese sich ganz durchdringen und in eins schmelzen, da entsteht Philosophie; [……] (AF 304)
> 哲学もまた二つの争う力、つまり文学と実践の結果である。この二つが完全に浸透しあい、一つに溶けあったとき、哲学が成立する。〔……〕

元来「理論」ないし「観照」Theorieがその座を占めるところを「文学」Poesieに置き換え、人間の認識の形式として「文学」を据える。哲学的認識は文学的形式において可能となることを高らかに宣言しているかのようである。しばしばみられるジャンルの混淆は、ロマン主義的な文学の特徴と位置づけられる。「引き離されたあらゆる文学ジャンルをふたたび合一し、文学を哲学および修辞学と結びあわせるだけでなく、さらに韻文と散文、独創性と批評、人為文学と自然文学を混ぜあわせ溶かしあわせる」（AF 116）のがロマン主義の文学の使命であるという。従って散文である哲学への要求もまた高く掲げらなければならない。それは客観と主観の混淆をも要求するものである。

> Ein Philosoph muß von sich selbst reden so gut wie ein lyrischer Dichter. (AF 413)
> 哲学者は、抒情詩人とおなじように自分自身について語らなければならない。

---

[7] René Wellek: *A History of Modern Criticism: 1750-1950*. London 1966, p.2.　翻訳に際しては同書のドイツ語版を参照した。RW: *Geschichte der Literaturkritik: 1750-1950*. Übers. von Edgar u. Marlene Lohner.　Darmstadt 1959, S.14.

客観を重視する哲学のあり方に、イロニーをもって語られたことばであるが、ここには19世紀に叫ばれはじめる主観主義（Subjektivismus）の萌芽がみられる。「文芸批評の歴史上、18世紀半ばから1830年までの時代は、明らかに今日の我々に関わっている本質的問題のすべてを提起している。古典古代から受け継がれ、16、7世紀のイタリアとフランスとを土台にして体系にまで高められた巨大な古典主義的批評体系は、この時代に瓦解した。19世紀初頭のロマン主義運動に結晶化する多種多様な新しい潮流が現れるのがこの時代である」[8] とウェレックは言う。確かにシュレーゲルは、何かを瓦解させ、何かを出現させたのであった。そしてイロニーも、ウェレックの判断に従えば、シュレーゲルをもって始まる。すなわち、「対立とそこから生ずる緊張は、容易にイロニーとパラドクスに関係づけることができる。イロニーの美的な、従って修辞的なだけではない使用は、フリードリヒ・シュレーゲルに端を発する。」[9]「断片」、「小説」、「哲学」といった散文を芸術形式と主張し続けること、これもまたイロニーの態度である。

> Vermischte Gedanken sollten die Kartons der Philosophie sein. Man weiß, was diese den Kennern der Malerei gelten. Wer nicht philosophischen Welten mit dem Crayon skizzieren, jeden Gedanken, der Physiognomie hat, mit ein paar Federstrichen charakterisieren kann, für den wird die Philosophie nie Kunst, und also auch nie Wissenschaft nur durch die Kunst, wie der Dichter im Gegenteil erst durch Wissenschaft ein Künstler wird. (AF 302)
> 雑多な思考の断片は、哲学の下絵だということができるだろう。下絵というものが絵の玄人にとってどんな価値をもつかは周知のとおりである。哲学的な世界をクレヨンでスケッチし、外貌を得た思想をどれも筆をとって簡単に特性描写ができない者にとっては、哲学は決して芸術となることはない。従って決して学問となることもない。哲学が学問となるには、芸術を経由していくほかないからである。それは詩人が逆に、学問を経由してはじめて芸術家となるのと同断である。

哲学と文学のどちらかに優劣を与えるのではなく、その二つの結びつきを重要視し、実現しようとするのは、発展的普遍文学が生成するための重要な過程であった。ここで「普遍」の概念は、静的な像ではなく、動的なプロセスと措定される。

> Universalität ist Wechselsättigung aller Formen und aller Stoffe. Zur Harmonie gelangt sie nur durch Verbindung der Poesie und der Philosophie: auch den universellsten vollendetsten Werken der isolierten Poesie und Philosophie scheint die letzte Synthese zu fehlen; dicht am Ziel der Harmonie bleiben sie unvollendet stehn. Das Leben des universellen Geistes ist eine ununterbrochene Kette innerer Revolutionen; alle Individuen, die ursprünglichen, ewigen nämlich leben in ihm. Er ist ein echter Polytheist und

[8] RW: a.a.O. p.1, S.15.
[9] RW: a.a.O. p.2, S.16.

trägt den ganzen Olymp in sich. (AF 451)
普遍的教養とは、あらゆる形式とあらゆる素材の相互充足である。それは文学と哲学の結合によってのみ、調和を得ることができる。文学と哲学とが切り離された作品は、いかに総合的であり完成されていても、最後の綜合が欠けているように思われる。すなわち調和の目標を目前にしつつも、未完成のままにとどまっている。総合的精神の生命は、内的な革命の途絶えることのない連鎖である。すべての個体が、すなわち根源的にして永遠の個体が、このような精神のなかで生き続けている。総合的精神は、真の多神論者であり、オリュンポス全体をおのがうちに抱いている。

これは『アテネーウム』の掉尾を飾る一文である。ここで言われる調和もまた、静的な状態を指し示しているのではなく、生成の過程として現れるものとイメージされている。文学と哲学の結合、これは次のことばに尽くされる。

In der wahren Prosa muß alles unterstrichen sein. (AF 395)
真の散文においては、あらゆる箇所が強調されていなければならない。

このイロニーに満ちた短いことばには、散文の意志と当為とがこめられている。そして「批評」もまた、発展的普遍的文学の生成に寄与する散文の芸術でなければならなかった。

### 3　批　　評

Jede philosophische Rezension sollte zugleich Philosophie der Rezension sein. (AF 44)
哲学の批評はどれもが、同時に批評の哲学でなければならないはずなのだが。（傍線、傍点、引用者）

批評も散文の芸術である。批評のあるべき姿を批評において内省する態度が、シュレーゲルにはじまる。引用にみられる非現実話法は、いまだ実現せぬ当為の表現である。初期ロマン派の代表的な先導者であったシュレーゲル兄弟は、雑誌出版者の顔を持っていたが、執筆者としての彼らは、文学の可能性への妥協ない探求者の顔を持っていた。しばしば引用される断片116は、ロマン主義文学の可能性に可能な限り言い及んでいる。「文学を社交のなかへもちこんで活気あらしめ、生活と社交を文学的なものに変える」（AF 116）ことがロマン主義文学の使命の一つであるという。批評は、作品という独創性を促進するばかりでなく、それを読者へとつなぐ行為である。哲学と文学と批評とを結びつけ、かつはまた生活と社交を文学的なものにすることがこれほど強調されていたことを翻って考えれば、そのような試みが完遂されていなかったことを示唆するものである。

Sie jammern immer, die deutschen Autoren schreiben nur für einen so kleinen Kreis, ja oft nur für sich selbst untereinander. Das ist recht gut. Dadurch wird die deutsche Literatur immer mehr Geist und Charakter bekommen. Und unterdessen kann vielleicht ein Publikum entstehen. (AF 275)

ドイツの作家たちはいつもほんの小さなサークルのために、それどころか多くの場合、ただ自分自身のためにしか書かないと、人びとはいつも歎く。けれどもそれはまことに結構なことだ。そのことによってドイツの文学は、だんだん精神と個性とを獲得してゆくのだ。そのうちことによると読者層というものも生まれてくるかもしれない。

文学を取り巻く成熟していない環境が、逆説的に表現されているとすれば、この逆説はまた、シュレーゲルが抱いていた、普遍文学の射程にある読者層の生成を期待する表明にも聞こえる。逆説ないしイロニーに含まれる否定性は、よりよいもののために場所を与えんがために、過てるものを取り除くことに他ならない。『アテネーウム』に先だって出版された『リュツェーウム断片』に、「まことの作家というものは、読者を想定しないで書くか、あるいはすべての人たちのために書く。あれやこれやの人たちが読みたがるように書く者は、読まれるに価しない」(LF85) とある。[10] シュレーゲルによる否定性は、「普遍化」を阻む一切のものに対して向けられていた。そしてシュレーゲルにとってそれは、娯楽という一語で片づけられる「文学」であったようである。従って、読書そのもの、ないし批評そのものにも普遍文学の生成過程に必要な要請が課せられることとなる。

Lesen heißt den philologischen Trieb befriedigen, sich selbst literarisch affizieren. Aus einer Philosophie oder Poesie ohne Philologie kann man wohl nicht lesen. (AF 391)
読むとは、文献学的衝動を満足させ、自分自身を学問的に刺戟することである。文献学のない単なる哲学あるいは文学からは、おそらく何も読み取ることはできない。

「文献学」Philologieは、語源どおりに「ことばを愛する」という意味で用いられている。そして文献学とは、書かれたものとしての哲学、文学との対話の態度に他ならない。さらにここでは、読書という行為、読み手の態度にも言及されている。読み手とは、批評家にとどまらず、生成しつつある読者層へと敷衍される。

「生活と社交を文学的なものに変える」こと、「読者層を生み出す」ことがロマン主義的文学の使命であるとすれば、これに寄与する批評こそ、その新しい姿が提示されねばならない。

Fast alle Kunsturteile sind zu allgemein oder zu speziell. Hier in ihren eignen Produkten sollten die Kritiker die schöne Mitte suchen, und nicht in den Werken der Dichter. (AF 167)
ほとんどすべての批評（Kunsturteil）は、あまりにも一般的に過ぎるか、あるいは特殊的に過ぎる。批評家（Kritiker）は、詩人たちの作品のなかにではなく、彼ら自身の作品のなかに麗しき中庸を求めるべきではないだろうか。

---

[10] R.エンゲルジングは、ドイツのおける読書の社会史を扱う著書のなかで、シュレーゲルのこの断片を引用しつつ、同時代の読書人口の膨張を裏付ける拠り所としている。「大衆を相手にする著述家たちは、特殊な読者を相手に著述するという考え方などもう受けつけようともしないほどになった。」専門的な分野の読者層ではなく、読者大衆が成立した時代の到来である。R.エンゲルジング『文盲と読書の社会史』（中川勇治訳）、思索社、1985年、114頁。

これまでの批評のあり方を否定するにあたってKunsturteil（芸術を判断すること）という語彙を用い、来るべき批評をRezensionと名付け、批評そのものについての議論が『アテネーウム』のここかしこに配置され展開されている。批評そのものは「美しき中庸」である芸術作品とならなければならない。そのためには、批評が芸術となる道筋、すなわちその哲学と文学の融合を経験しなければならなかった。批評そのものが、まだ一箇の芸術作品（あるいは断片）となるための生成過程にあることは、以下の表現にもみてとられる。

> Die echte Rezension sollte die Auflösung einer kritischen Gleichung, das Resultat und die Darstellung eines philologischen Experiments und einer literarischem Recherche sein. (AF 403)
> 真の批評（Rezension）とは、批判的方程式を解くことであり、哲学的実験と文学的調査の結果を叙述することであるべきだろう。

批評を議論するにあたって、非現実の当為の表現（sollte）が多用される。シュレーゲルが意図する「真の批評」も「哲学的批評」も「批評の哲学」もまだ存在せず、実現に向けて生成過程にあることが、その表現形式において示されている。

> Eine Charakteristik ist ein Kunstwerk der Kritik, ein visum repertum der chemischen Philosophie. Eine Rezension ist eine angewandte und anwendende Charakteristik, mit Rücksicht auf den gegenwärtigen Zustand der Literatur und Publikums. Übersichten, literarische Annalen sind Summen oder Reihen von Charakteristiken. Parallelen sind kritische Gruppen. Aus der Verknüpfung beider entspringt die Auswahl der Klassiker, das kritische Weltsystem für eine gegebne Sphäre der Philosophie oder der Poesie. (AF 439)
> 特性描写とは、批評の芸術作品である。化学的哲学の検査報告である。評論Rezensionとは、文学や大衆（読者、Publikum）の現状を顧慮して応用された、あるいは応用を意図した特性描写である。概観とか文学年鑑といったものは、特性描写の総括あるいは連結（シリーズ）である。対比とは批評の組合せ（グループ）である。両者を結びつけることによって、古典的巨匠たちの精選集が生れる。哲学あるいは文学の所与の分野の批評的宇宙体系が生ずる。

批評が芸術となることによって、文学もまた生成される。「総括」、「連結」、「組合せ」、「精選集」といったことばは、一つ一つの構成要素が、体系を生成する「断片」として完成され、有機的に結びつきあうありさまを活写しているかのようである。さまざまな比喩を駆使して、批評の芸術性は主張される。

シュレーゲルの批評活動は、文学と哲学とをむすびつけようとした最初期の試みであるにとどまらない。さらにそこに批評そのものを結びつけることによって、批評を芸術に生成しようとした。シュレーゲルの批評はまた、読者層を極めて意識的に視野に入れていた。これは、時代の要請であるばか

りでなく、シュレーゲルによる来るべき時代への要請であった。シュレーゲルによって、大衆を視野に入れた批評空間は、周到に準備された。